
研究報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 7
P.40-48 (2019)

地域住民が模擬患者役割を担う際の課題

Issues concerning the Adoption of Local Residents as Simulated Patients

石塚 淳子¹⁾ 笹野 幸春¹⁾ 内野 恵子²⁾ 岩清水 伴美¹⁾
ISHIZUKA Junko SASANO Yukiharu UCHINO Keiko IWASHIMIZU Tomomi

要 旨

近年、模擬患者 (Simulated Patients) を導入した看護教育方法が広がりつつある。模擬患者が看護教育に参加することの意義については数多く報告されており、模擬患者養成も始まっている。本研究では地域住民が模擬患者ボランティアの活動において体験したこと、抱える課題を明確にすることを目的として、模擬患者 20 名にグループインタビューを実施し、質的帰納的に分析した。

模擬患者が語った体験から得たこととして【新たな自分の発見と学びを実感できる喜びと満足感】【看護教育への関心の高まりと理解の促進】の 2 カテゴリー、今後の課題として【未熟な学生に対する励ましの葛藤】【シナリオ通りに役割を演じられない難しさ】【看護学生へのコメントの難しさ】【模擬患者としての役割遂行に対する不安】【看護学生の学習状況の理解の必要性】【試験という評価にかかわる不安】【模擬患者に対するフィードバックの必要性】【模擬患者養成の必要性】【素人としての模擬患者の良さの容認】【地域に拓かれた大学の役割の期待】の 10 カテゴリーが導き出された。

地域住民を活用するに際しては、地域の特性を把握し、地域住民のニーズを把握しながら養成していく必要性が示唆された。

索引用語：地域住民ボランティア、模擬患者、グループインタビュー

Key words : Volunteers from local residents, Simulated Patients, Group interview

1. はじめに

近年、模擬患者 (Simulated Patients) を導入した看護教育方法が広がりつつある。いくつかの医療系大学においては模擬患者養成を行っており、主に診察場面におけるコミュニケーション技術の学習や診察技術の習得を目的とした学習に用いられている^{1,2)}。看護教育においても 2000 年代の初めより模擬患者参加型教育が取り入れられ、2005 年頃からは標準化された模擬

患者養成が行われ始めている³⁻⁸⁾。

模擬患者が看護教育に参加することの意義は、現在いくつかの研究成果がある。模擬患者が参加する動機として、看護学生の成長を願い、社会の役に立ちたいというだけでなく、模擬患者自身の成長や新たな存在意義、患者の立場や思いを理解してほしいということも明らかになっている^{9,10)}。

模擬患者参加型の教育は学生に対する効果があることも多数報告されている。模擬患者を導入するにあたっての事前準備にかかる時間、費用などの課題も挙げられており、教育効果が高いとはいえ、たやすく導入できる方法ではないことも指摘されている¹¹⁻¹⁵⁾。

1) 順天堂大学保健看護学部

2) 国際医療福祉大学小田原医療学部

1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

2) *International University of Health and Welfare*

(Nov. 9, 2018 原稿受付) (Jan. 18, 2019 原稿受領)

現在、順天堂大学保健看護学部で基礎看護学や公衆衛生看護学、客観的臨床能力評価試験（以下 OSCE と略す）で地域住民を活用した学生の教育を実践している。これらの模擬患者役割を担った地域住民が看護教育に期待することは大きく、模擬患者の養成に関するニーズは十分にあると考える。

そこで三島市にある看護系大学としての利点を生かし、大学として地域住民と協同した看護教育を目指すことを目的に、まず基礎的研究として、2017 年度後期の授業に参加した模擬患者を対象にインタビュー調査を行い、模擬患者をやってみてよかったこと、反対に困ったこと、今後の課題について明らかにし、模擬患者の養成プログラムの開発についての示唆を得ることにした。

II. 研究目的

2017 年度後期の授業に参加した模擬患者を対象にインタビュー調査を行い、模擬患者をやってみた感想、今後の課題についてグループインタビュー法によって明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

グループインタビュー法を用いた質的帰納的デザイン

2. 調査期間

2018 年 1 月にインタビューを実施した。

3. 研究対象者

順天堂大学保健看護学部において、これまでに模擬患者として活動経験がある地域住民の方を対象とした。

2017 年度後期の開講科目である「看護援助論」の演習に参加した模擬患者に依頼文書を手渡し、口頭で説明を加えた後、参加の意思を表明した地域住民に対しインタビューの希望日時を確認したうえでグループメンバーを調整した。

4. データ収集方法

インタビューガイドに基づいて、60 分程度のフォーカスグループインタビューを実施した。面接者 1 名とグループ内の様子を観察する記録者 1 名で行った。

5. データ分析方法

グループインタビューで得られたデータを録音テープやメモから逐語録に書き起こし、文章の意味を読み取れる最小の単位に分け、課題となることに焦点を当てコード化し、カテゴリーを導き出した。なお、分析過程では分析結果の信頼性を確保するために質的研究の経験のある教員を含めた研究者ら 4 名で検討を重ねた。

IV. 倫理的配慮

本研究は、順天堂大学保健看護学部研究等倫理委員会の承認を得て実施した（順保倫第 29-08 号）。

研究対象者には、研究の目的・意義・方法・データの閲覧・保管方法・データの公表について、文書および口頭で説明を行った後、研究協力が可能と用紙の返信のあった対象者に実施した。本研究はグループインタビューという研究方法の特性から、顔見知り同士での話し合いであるので、この場で知り得た内容は口外しないように研究対象者に説明した。インタビュー開始後、録音されたデータは撤回できないことも説明を行った。また、研究協力の撤回や中断をした場合においても模擬患者としての活動には一切影響しないことを説明した。

V. 結果

1. 対象者の属性

研究協力が承諾を得た地域住民 20 名を希望日時の調整後、4 グループに分けてグループインタビューを行った。対象者 20 名（男性 8 名、女性 12 名）の年齢は 60 歳代 10 名、70 歳代 7 名、80 歳代 3 名であった。

模擬患者としての経験回数は、1 回～4 回であった。

4 つのグループのインタビュー時間は平均して 67

分（53～81分）であった。

2. 模擬患者役割の体験から得たもの

以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは『 』、具体的な語りの内容は「 」を示す。

模擬患者が語った体験から得たものとして、【自分自身の学びを実感できる喜びと満足感】【看護教育への関心の高まりと理解の促進】の2カテゴリーが導き出された（表1）。

1) 【自分自身の学びを実感できる喜びと満足感】

このカテゴリーは地域住民が模擬患者をやってみて、思ってもみない自分の反応に驚き、若い看護学生と接することを楽しみにしていることを示しており、『新たな自分の発見と学び』『若い学生と接することによる社会とのつながり』『模擬患者体験の有意義さと満足感』『模擬患者体験を生活や今後の人生に役立てる』という4つのサブカテゴリーから構成されていた。「参加してみて学生のためではなく、私自身もいろいろな意味で勉強になった」「模擬患者になって新しい経験でとても有意義だったと思う」と語っていた。

2) 【看護教育への関心の高まりと理解の促進】

このカテゴリーは資格を取ることの難しさに理解を示し、地域住民として大学病院の看護師として育つ看護学生に期待していることを示しており、『大学病院への親近感と信頼の芽生え』『看護学生の理解の促進と期待感』『資格取得の必要な看護職への理解の促進』

の3サブカテゴリーから構成されていた。「病院で看護師のボランティアやってるよ、って言ったら親近感持てた」「学生はみんなまじめにやっている、よくやっていると思った」「大学でどんな勉強をしているのかなってというのは、ここにきて初めて、こういう勉強もしているんだなってというのが参加して初めてわかった」と語っていた。

3. 模擬患者役割を担ってみて感じた課題

模擬患者が語った課題は【未熟な学生に対する励ましの葛藤】【シナリオ通りに役割を演じられない難しさ】【看護学生へのフィードバックの難しさ】【模擬患者としての役割遂行に対する不安】【看護学生の学習状況の理解の必要性】【試験という評価にかかわる不安】【模擬患者に対するフィードバックの必要性】【模擬患者養成の必要性】【素人としての模擬患者の良さの容認】【地域に拓かれた大学の役割の期待】の10カテゴリーが導き出された（表2）。

1) 【未熟な学生に対する励ましの葛藤】

このカテゴリーは学生がまだ教育の途中であり、未熟な点を承知しながらできないことがあるのは仕方ないという気持ちとなんとか励ましたいという気持ちで葛藤することを示しており、『看護学生の学習段階の未熟さ』『できない学生への思いやりと励ましの葛藤』の2サブカテゴリーで構成されていた。

表1 模擬患者体験から得たもの

カテゴリー	サブカテゴリー
自分自身の学びを実感できる喜びと満足感	新たな自分の発見と学び
	若い学生と接することによる社会とのつながり
	模擬患者体験の有意義さと満足感
	模擬患者体験を生活や今後の人生に役立てる
看護教育への関心の高まりと理解の促進	大学病院への親近感と信頼の芽生え
	看護学生の理解の促進と期待感
	資格取得の必要な看護職への理解の促進

表2 模擬患者役割を担ってみて感じた課題

カテゴリー	サブカテゴリー
未熟な学生に対する励ましの葛藤	看護学生の学習段階の未熟さ
	できない看護学生への思いやりと励ましの葛藤
シナリオ通りに役割を演じられない難しさ	シナリオ通りに演じることの難しさ
	シナリオのわかりにくさ
	シナリオ通りに演じない自由度の保証
看護学生へのフィードバックの難しさ	学生へのフィードバックの難しさ
	事前のフィードバックの内容の説明
模擬患者としての役割遂行に対する不安	模擬患者役割に対する不安
	模擬患者として振り返りの機会の必要性
	模擬患者を演じることへの自身のなさ
看護学生の学習状況の理解の必要性	看護学生の学習段階の理解
	看護学生との双方向の学習の機会
	看護学生の授業の理解の必要性
試験という評価にかかわる不安	試験という評価に対する理解不足
	試験方針の説明不足
模擬患者に対するフィードバックの必要性	模擬患者として役にたったかという自問
	模擬患者としての自己成長の期待
模擬患者養成の必要性	模擬患者としての意見交換の必要性
	模擬患者としての学習の場の必要性
素人としての模擬患者の良さの容認	模擬患者役の自由度の保証
	模擬患者の素人性の容認
	模擬患者の良し悪しは不要
地域に拓かれた大学の役割の期待	地域にある大学の存在理由
	多くの地域の人に関心を持てる大学
	地域の病院も含めた大学のリーダーシップ

学生が課題に困っている場面では「学生がどこまで教育されてどこまで知っているのか分からなく、こんな質問しても良いのかなと思った」り、どうしていいかわからなくて黙ってしまったりした際に「(沈黙を)破るために、少し話だしてしまおうと、余計なことかなと思って、どこまでやっていいのか悩む」と語っていた。

2) 【シナリオ通りに役割を演じられない難しさ】

このカテゴリーは、模擬患者がシナリオを理解しながら役割を演じようと努力するが、シナリオ通りにい

かない出来事に戸惑い、ある程度自由に演じたいという気持ちを示しており、『シナリオ通りに演じることの難しさ』『シナリオのわかりにくさ』『シナリオ通りに演じない自由度の保証』の3サブカテゴリーで構成されていた。

「シナリオにはスペルで書いてあるので意味がわからないと説明できないからインターネットで調べる」のように模擬患者は事前にシナリオを自分で調べたり、「シナリオには大まかなことが書いてあるけれど、どこまで言って良いかわからない」とシナリオ通りに

いかなかったり、「模擬患者が学生の受け答えを自由にしても構わないと思った」のようにある程度の自由さを認めてほしいと語っていた。

3) 【看護学生へのフィードバックの難しさ】

このカテゴリーは模擬患者として学生に何らかのアドバイスをフィードバックして役立ててほしいという願いとその難しさを示しており、『学生へのフィードバックの難しさ』『事前のフィードバックの内容の説明』の2カテゴリーで構成されていた。

模擬患者を演じるだけのOSCEよりも、学生に対してフィードバックをする機会があるほうがよいとし、「一生懸命な学生に対して何か褒めてあげて言わなくてはと思うが、探すのが大変」と「事前に言ってもらいたい、言ってほしくないことを事前に（教えてほしい）」のように、どのようにフィードバックをすれば効果的かを知りたいと語っていた。

4) 【模擬患者としての役割遂行に対する不安】

このカテゴリーは模擬患者としての役割が十分に果たしているのか不安であり自信がないため、模擬患者が終わった後に振り返りの機会が欲しいということを示しており、『模擬患者役割に対する不安』『模擬患者としての振り返りの機会の必要性』『模擬患者を演じることへの自信のなさ』の3サブカテゴリーで構成されていた。

模擬患者の役割が終わって振り返りがないと「(やりっぱなしで) 帰ってしまい良かったのかなと思う」「自分の模擬患者で良かったのかと思う」という不安が生じ、「患者としての思いを伝えることがとても易いようで難しい」のようになかなか自信が持てないと語っていた。

5) 【看護学生の学習状況の理解の必要性】

このカテゴリーは看護学生の学習段階を知った上で、学生の教育に適した模擬患者役割を担う必要性和、日ごろの看護学生の学習に参加し、学生の授業の様子を模擬患者として知っておく必要性を示しており、『看

護学生の学習段階の理解』『看護学生と双方向の学習の機会』『看護学生の授業の理解』の3カテゴリーで構成されていた。

模擬患者を引き受けるとなると「学生がどれくらい基礎知識を教わっているのかある程度知っていないと、余分なことを強いてしまいそうで学生に悪いと思う」と思うようになり、そのためには学生と「一緒に勉強したい」「学校でよくあるように授業参観で後ろでみているように(みたい)」と学生の学習に参加したいと語っていた。

6) 【試験という評価にかかわる不安】

このカテゴリーはOSCEの模擬患者を担うにあたり、学生の評価にかかわる責任感を示しており、『試験という評価に対する理解不足』『試験方針の説明不足』の2サブカテゴリーで構成されていた。

学生が評価される際の緊張感を知り、単にシナリオ通りに演じるだけでなく、「試験内容がよくわからない」というように、模擬患者としても試験内容を理解しておく必要性や「このような方針でやっています、とこのを決めればよい」、という大学の方針を理解する必要性や評価にかかわる責任の大きさと不安を語っていた。

7) 【模擬患者に対するフィードバックの必要性】

このカテゴリーは模擬患者として役にたっているのか、模擬患者として評価してほしいことを示しており、『模擬患者として役にたったかという自問』『模擬患者としての自己成長の期待』の2サブカテゴリーで構成されていた。

ただお礼を言われるだけでなく「模擬患者に対する講評をやってほしかった」「学生の感想があればいいところ悪いところを含めて教えてほしい、個人個人ではなくても終わった時点でいいところ悪いところ、統計がとれるのならいただきたい」と語っていた。

8) 【模擬患者養成の必要性】

このカテゴリーは模擬患者の経験を重ねるごとに、

役割に対する学習意欲が芽生え、模擬患者養成の必要性を示し、『模擬患者としての意見交換の必要性』『模擬患者の学習の場の必要性』の2サブカテゴリーで構成されていた。

「模擬患者としての熟成度、養成されている部分がまだ不十分なんで、どのように身につけていけばいいか課題である」と語り、可能であれば「ちょっと模擬患者の勉強会に参加してみたいな」と学習の機会があれば参加したいと考え、「模擬患者通しで意見交換しながら吸収したい」と模擬患者同士の意見交換の機会の必要性を語っていた。

9) 【素人としての模擬患者の良さの容認】

このカテゴリーは模擬患者としての自由度をある程度は保証し、形式的な患者役にとらわれたくないことを示しており、『模擬患者役の自由度の保証』『模擬患者の素人性の容認』『模擬患者の良し悪しは不要』の3サブカテゴリーで構成されていた。

地域住民が気軽に参加するには「ある程度のマニュアルがあるだろうが、少し外れた模擬患者もいてもよい。そういうことに対して対応できるように勉強会をしてしまうとマニュアルができてしまい新鮮味がなくなる」と素人であることの意義と「模擬患者に点数をつけるのは試験みたいだから、そうすると足を運ぶのが嫌になると思う」のように良し悪しの評価をされると嫌になるという気持ちを語っていた。

10) 【地域に拓かれた大学の役割の期待】

このカテゴリーは地域住民の願いとして、大学教育はもちろんのこと、地域の医療機関の質の向上も願う気持ちを示しており、『地域にある大学の存在理由』『多くの地域の人に関心を持てる大学』『地域の病院も含めた大学のリーダーシップ』の3サブカテゴリーで構成されていた。

模擬患者役割を担うことで将来の看護職養成を担うことは、単に大学教育だけでなく「教育の現場である学校が、直接病院へ出向いて患者の意見を伝えて（現

場もよくしてほしい）」「せっかく大学がここにあるので施設の看護師とか今たくさんあるのでリーダーシップをとって手を伸ばしてもらえれば、周辺の看護のレベルも上がると思う」という地域の保健医療の質の向上を願っていることも語っていた。

VI. 考 察

本学が模擬患者を活用した授業を開始したのは2015年ごろである。大学の近くの地域住民の方たちに声をかけ、健康教育やコミュニケーション技術演習などに参加を依頼してきた。地域住民の方たちは退職者や長年主婦であった方たちが主であり、年齢としては高齢者がほとんどである。

このように本学の模擬患者の特徴は地域住民の有志であるという条件があるなかで、本学が目指す地域住民が参画できる看護教育としての課題を考察する。

1. 地域住民が模擬患者をする意義

内閣府の高齢社会白書によると、60歳以上の者のグループ活動では60歳～69歳の約7割、70歳以上の約5割弱が働いているか、またはボランティア活動、地域社会活動（町内会、地域行事など）趣味やおけいこ事を行っている。また、何らかの社会的な貢献活動に参加していると回答した人は約3割で、参加している活動は「自治会、町内会などの自治組織の活動」（18.9%）「趣味やスポーツを通じたボランティア・社会奉仕などの活動」（11%）が多い¹⁸⁾。

本学の模擬患者の参加依頼をする場合、町内会や退職者の会を通じて代表者に紹介してもらう方式で模擬患者活動をはじめ、実際にやってみてよかった経験から繰り返して模擬患者役に参加してくださる地域住民の方たちがほとんどである。

活動を通して【自分自身の学びを実感できる喜びと満足感】や【看護教育への関心の高まりと理解の促進】という模擬患者活動に意義を感じてくださった地域住

民の方はリピーターとなってくれる。このことは先行研究である阿部ら⁹⁾の【SP参加型教育への授業改善への示唆】【地域住民の健康教育の機会】や、玉田ら¹⁹⁾の【看護教育への関心】【看護師養成への貢献】【自由な時間の有効活用】【自分の健康への関心】【社会のつながりや貢献】とも一致する結果となった。その経験は【看護への理解の深まり】【日常生活に活用できる知識の獲得】【学生との交流による活性化】¹⁹⁾というメリットを生むことになっている。

地域住民が模擬患者をやってみようという動機としては、まず身近な町内会や活動団体の誰かから紹介され、仲間と一緒にであれば申し込む、というきっかけが必要となる。そして、実際に活動してみると、若い看護学生の熱心さや純粋さに触れることで、自分たち自身が有意義で満足な時間を過ごせた、と実感する。そして、看護教育の一端に触れ、今後世話になるかもしれない看護職の育成の一員としての役割を担うという責任を果たしているという自己効力感とつながる。

模擬患者役割は中高年の年代が多いということは、高齢社会白書で報告されたように、社会貢献活動の一環でもあり、これからの高齢化が進むわが国においては彼らのマンパワーを活用していくことは重要課題である。

2. 地域住民が模擬患者役割を体験して得た課題(図1)

地域住民が模擬患者を担うためには、いくつかの課題があることが報告されている¹⁷⁾。模擬患者が語った課題として、特に大学として取り組む必要があると考えるのは地域住民に負担にならない模擬患者養成である。【未熟な学生に対する励ましの葛藤】【シナリオ通りに役割を演じられない難しさ】【看護学生へのフィードバックの難しさ】【模擬患者としての役割遂行に対する不安】のように模擬患者役割を担うことに不安と悩みを持ちながら、頼まれたらやります、というよう

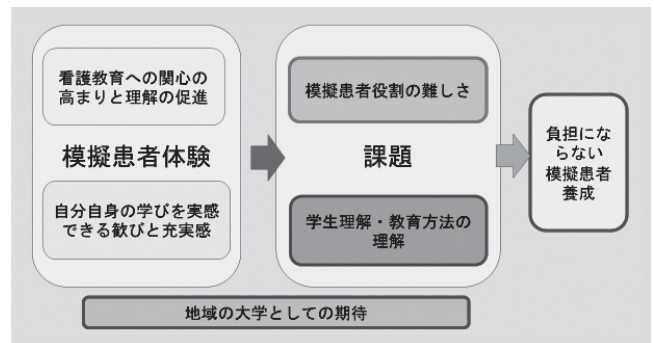


図1 地域住民が模擬患者役割の体験から得た課題

な参加で現在は継続しているのが実情である。【模擬患者に対するフィードバックの必要性】のように最初の段階としては模擬患者同士の交流や、体験の振り返りなどのお互いの模擬患者体験を語り合う場づくりが必要であろう。

また、地域住民には模擬患者役割を引き受けたからには学生の教育の一端を担っているという「責任感」があり、学生の学習状況を理解し、大学の教育方針を知りながら模擬患者役割を担いたい、という希望がある。年数回の模擬患者役ではなく、授業や演習にもっと活用し、大学に行くことが特別なことではなくなるよう、【看護学生の学習状況の理解の必要性】と模擬患者の参加意欲を活かすことも必要であろう。

さらに、訓練された模擬患者とは違い、地域住民の素人性を活かし、【素人としての模擬患者の良さの容認】を取り入れた模擬患者の役割を構築していくことも今後の課題であろう。地域住民が気軽に参加でき、ある程度の自由度が許容される模擬患者、学生が評価を受ける試験という厳密さの求められる模擬患者、それぞれの内容に応じた模擬患者の役割がある。模擬患者の参加依頼をする際には、目的を明確に伝え、模擬患者にも種類があり、適切な模擬患者役割が担えるように、大学側も企画することが必要となる。

地域住民は単にボランティアとして模擬患者を引き受けているだけでなく、【地域に拓かれた大学の役割の期待】をして、これからの地域社会の保健医療福祉

の向上を願っていることを忘れてはならない。

VII. 結 論

本研究を通して、以下のことが明らかになった。

1. 地域住民が模擬患者活動に参加するには、退職者などの高齢者が多く、模擬患者体験をすることで、新たな自分を発見や自己成長を実感し、社会のために役立っているという「利他性」が大きな動機となっている。
2. 地域住民が模擬患者として活動するには、気軽に参加でき、かつ事前の練習などの多くの課題や能力を必要とされない「素人性」をある程度は認めてほしいという願がある。
3. 地域住民の多くは退職後の高齢者であり、模擬患者役割を引き受けたからには学生の教育の一端を担っているという「責任感」があり、学生の学習状況を理解し、大学の教育方針を知りながら模擬患者役割を担いたい、という希望がある。
4. 地域に拓かれた大学の役割として、学生の教育のみならず、地域の病院の看護師の教育にも模擬患者の活動が役に立つことを地域住民は期待をしている。

以上のことから、地域住民を模擬患者として活用する際には、模擬患者団体から派遣された訓練された模擬患者としての役割ではなく、地域の特性を把握し、地域住民のニーズを把握しながら養成していく必要性が示唆された。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力いただいた模擬患者の皆様へ深く感謝いたします。

なお、本研究は平成29年度順天堂大学保健看護学部共同研究の助成金を得て行った。

引用文献

- 1) 藤崎和彦：アメリカの医学教育における模擬患者導入の現状とその理論、看護展望、18 (8)、44-48、1993.
- 2) 志村俊郎、吉井文均、吉村明修、他：医学部・医科大学における模擬患者・標準模擬患者養成および参加型教育に関する実態調査、医学教育42巻1号29-35、2011.
- 3) 大滝純次：日本の看護教育への模擬患者導入の意義、看護展望、18 (8) 49-51、1993.
- 4) 本田多美枝、上村朋子：看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察教育の特徴および効果、課題に着目して、日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report7号、67-77、2009.
- 5) 清水裕子、横井郁子、豊田省子、他：看護教育における模擬患者(SP：Simulated Patient・Standardized Patient)に関する研究の特徴、日本保健科学学会誌10巻4号、215-223、2008.
- 6) 山本直美、伊藤朗子、富澤理恵、他：看護技術教育のための模擬患者(Simulated Patient:SP)養成の実際、千里金蘭大学紀要12号、151-160、2015.
- 7) 浜端賢次、安藤恵、本田芳香：高齢者が参加しやすい模擬患者養成プログラムの検討、川崎医療福祉学会誌25巻1号、217-222、2015.
- 8) 瀧本雅昭、渡邊由加利、山本勝則、他：看護基礎教育における模擬患者養成プログラムの実際とその検証、SCU Journal of Design & Nursing6巻1号3-10、2012.
- 9) 阿部オリエ、小手川良江、本田多美枝、他：看護学実習前演習に地域住民が模擬患者として参加することの意義に関する研究、日本赤十字九州国際看護大学紀要、11、49-58、2012.
- 10) 宮崎貴子：日本の看護教育におけるSP(模擬患者/標準模擬患者)参加型学習の実態に関する文献

- 検討、日本赤十字武蔵野短期大学紀要 18 号、51-56、2005.
- 11) 小手川良江、阿部オリエ、本田多美枝、他：看護学実習前演習への模擬患者導入による学生の学びの実際：学生の気づきから生じた変化に着目して、日本赤十字九州国際看護大学紀要、12、47-56、2013.
- 12) 山本直美、久米弥寿子、中岡亜希子、他：模擬患者 (Simulated Patient : SP) に求められる資質 訓練された SP の語り、千里金蘭大学紀要 12 号、69-79、2015.
- 13) 鹿島英子、吉村牧子、吉本和樹、他：高齢者 SP (Simulated Patient) 養成の課題、関西医療大学紀要 8 巻、20-26、2014.
- 14) 吉田千鶴、佐藤亜月子、城野美幸、他：地域住民が模擬患者として参加した技術演習での学生の学び 今後の学習への動機付けに着目して、帝京科学大学紀要 10 巻、207-214、2014.
- 15) 小葉祐子、志田久美子、長谷川ゆり子、他：一般住民ボランティアによる模擬患者 (Simulated Patient) 参加の基礎看護技術演習における学生の学び、帝京科学大学紀要 10 巻、163-170、2014.
- 16) 原井美佳、上村浩太、坂東奈穂美、他：市民参画型の模擬患者養成プログラムの開発 共に育み合う市民主体の学習の場づくりを目指して、SCU Journal of Design & Nursing 10 巻 1 号、19-29、2016.
- 17) 山崎歩、中村もとゑ、鈴木香苗、他：看護系大学で活動する模擬患者ボランティアが抱える課題、日本赤十字広島看護大学紀要 16 巻、39-46、2016.
- 18) 内閣府 平成 30 年版 高齢社会白書 (全体版) (PDF 版) http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/30pdf_index.html (2018.11.1 閲覧)
- 19) 玉田雅美、渋谷幸、池田清子、他：地域住民ボランティアが参加する看護技術演習の意義－地域住民の思いと効果－、神戸市看護大学紀要、Vol.18、2014.